

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12332

研究課題名（和文）「境界」のアイランド文学 20世紀前半のアルスターを中心に

研究課題名（英文）'Border' Consciousness: Ulster Writing in the First Half of the 20th Century

研究代表者

中村 仁美（Nakamura, Hitomi）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：10739212

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は20世紀前半のアルスター（アイランド島北東部）の文学を顧みることを主眼とし、なかでも南北分割や国境の画定といった出来事と当時の文学作品の関連性を検証するものであった。出身地や宗教的出自等が異なる作家の作品を複数取り上げ、「境界」意識の表象について多角的に論究した。各作家の例を考察することで、南北分割後のアルスター、そして過渡期のアイランド島の文学の一面を照射することを試みるものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまでの文学史の記述において紙幅を割かれることの少なかった20世紀前半のアルスターの文学（おもに詩と小説）について、部分的ながら照射することができた点にある。1920年代に既成事実化した南北アイランド国境、そしてその近辺で生活する人びとの光景が文学作品にどのように表象されていたかについて、考察を深めることができた。

また、William Butler Yeats の後の世代を代表する詩人 Patrick Kavanagh について、さらに研究活動を進めることができた。

研究成果の概要（英文）：The main focus of this study was the literary and artistic landscape of Ulster (north-east of the island of Ireland) in the first half of the 20th century. In particular, it examined how the Irish partition and the creation of the Irish border were portrayed in literary works. The works of writers from different backgrounds were examined from various perspectives regarding their depictions of 'border' consciousness. By discussing examples of each writer, the study attempted to illuminate an aspect of the literature on post-partition Ulster and the island of Ireland during the transitional period.

研究分野：アイランド文学

キーワード：アイランド文学 アルスター 南北分割 国境地帯

1．研究開始当初の背景

本研究の主たる動機は、20 世紀前半のアルスターの文学を顧みることにあつた（「アルスター」は伝統的にはアイルランド島北東部 9 州の呼称である。今日では北アイルランド 6 州の呼称として使用されることがあるが、本研究報告では当時の背景に鑑み、広義の意味で用いたい）。

1920 年代初頭の北アイルランド成立による南北分割や、国境の画定といった出来事は、いかに当時の文学作品に描かれていたのだろうか。そこに表れる「境界」意識を検証することで、何が見えてくるのだろうか。本研究はそうした問いを端緒とし、おもに 20 世紀前半から半ばにかけて創作活動を行った作家たちの作品に着目することにした。その意味で、本研究は、報告者が 2015 年度からの三年間、「文学におけるアイルランド南北分割の総合的研究」（日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 B、課題番号 15K16707）と題して取り組んだ研究課題の延長線上にある。

2．研究の目的

本研究の目的は、南北分割との関連から、20 世紀前半のアルスターに縁のあった作家たちについて、作品内の「境界」意識の表象を中心に論究することであつた。各作家の伝記的背景を重んじながらも、局所的な理解に留まらない、横断的な読解を行うことで、これまでの文学史において紙幅を割かれることが少なかった 20 世紀前半のアルスターの文学の様相と、その複数性について、理解を深めることを目指した。前述した過去の研究課題による成果を引き継ぎながら、既成事実化した国境や、その近辺で暮らす人びとの生活を描く作品を検証しようと、研究を開始した。

3．研究の方法

本研究の具体的な研究プロセスは以下の通りである。研究の方法は、主に収集した文献の読解と成果発表に拠る。

一年目と二年目には、国内外での文献の収集、貴重資料の閲覧、集めた文献の精読、そして情報の整理を行った。前述した過去の研究課題「文学におけるアイルランド南北分割の総合的研究」において取り上げた作家（Benedict Kiely、Patrick Kavanagh、Sam Hanna Bell）に関連する資料に加え、Kavanagh と同じモナハン州出身であり、のちにアントリム州へ転居したカトリック作家 Michael McLaverty（Seamus Heaney が一時期務めていた St Thomas ' s Secondary School の校長でもあった）や、ファーマナ州生まれの作家 Shan Bullock にまで対象を広げ、関連資料を収集することを試みた。

次に、それらを基に考察した内容を適宜所属学会や研究会の場で発表し、研鑽を積んだ。毎度新たな発見、反省点、課題を得ることが多く、その後の論考執筆に繋げることができた。Kavanagh については研究歴が長くなってきたこともあり、本研究課題との直接的な関係にこだわらずに自身の読解を深め、新たな知見を模索することができた。

三年目以降、新型コロナウイルス流行の影響により国内外出張を控えたため、当初の研究計画に変更が生じた。後述するように、Kavanagh の小説 *The Green Fool* の翻訳をはじめ、各作家に対する自身の理解といま一度対峙する時間を確保するようにした。資料収集についてはさまざまな方法を試行し、次なる研究課題を見据えた活動を行った。

4．研究成果

2018 年 4 月から四年間にわたり取り組んだ本研究課題関連の成果は、雑誌論文 2 件、図書（論集）2 件、学会等での単独口頭発表 2 件である。

（1）2018 年度の研究成果

2018 年度はかねてより着目していた Michael McLaverty の小説や Patrick Kavanagh の詩について集中的に調査を行った。夏にはダブリン、イニスキーン、ベルファストを訪れ、文献資料の収集と閲覧に従事した。ダブリンでは Patrick Kavanagh Archive を所蔵している University College Dublin の James Joyce Library（Special Collections Reading Room）にて、Kavanagh の手稿やタイプライター原稿等を閲覧することができた。その他、イニスキーンでは Patrick Kavanagh Centre（Patrick Kavanagh Rural And Literary Resource Centre）、ベルファストでは Queens University Belfast の The McClay Library、そして Linen Hall Library を訪問し

た。その後、2019年3月には“Shancoduff”と題されたKavanaghの詩の様々なヴァージョンの存在について考察し、その成果を京都大学人間・環境学研究科の主催で行われたシンポジウム“*Irish Literature in the British Context: Voices from Kyoto*”にて口頭発表した。国内外の研究者と交流することができ、本課題に関しても視野を広げる機会を得た。

(2) 2019年度の研究成果

前年度までに収集した文献資料の講読と学術論文の執筆に努めた年となった。夏にはダブリンを訪問し、University College DublinのJames Joyce Library、Trinity College Dublin図書館、アイルランド国立図書館にて、文献の収集と閲覧にあたった。おもにKavanagh関連の資料や文芸誌類を閲覧した。その他、アイルランド国境地帯のなかでも、ドネゴール州（アイルランド共和国）とファーマナ州（北アイルランド）の境界線が通るペティゴを訪問した。2019年12月には、日本アイルランド協会第27回アイルランド研究年次大会にて、シンポジウム「アルスターの詩人たちと『伝統』」を企画する機会を得た。そこでKavanaghが「アルスター」を超え、自身の〈声〉を模索していった過程について、単独口頭発表を行い、考察を述べた。2020年1月には『立命館英米文学』第29号にMcLavertyの小説*Call My Brother Back*に関する論考を発表した。3月には、立命館大学英米文学会編『英語文学の諸相 立命館大学英米文学会論集』（金星堂）に、ファーマナ州生まれの作家Shan Bullockが1924年に発表した小説*The Loughsiders*とSam Hanna Bellの作品を読み解く論考を発表した。

(3) 2020年度の研究成果

2020年度は、新型コロナウイルス流行の影響により、当初研究計画に記したような渡航調査による文献資料の収集や閲覧は見送ることとなった。本研究課題に関連する成果は限定的となったが、資料の整理や見直しに大半の時間を費やしたほか、国内外の研究者との交流のなかで、論文を投稿する機会を得ることができた。2019年3月に参加した京都大学人間・環境学研究科主催のシンポジウムの成果は、Hiroko Ikeda and Kazuo Yokouchi編*Irish Literature in the British Context and Beyond: New Perspectives from Kyoto*として、2020年4月にPeter Lang社より刊行される運びとなった。Kavanaghの詩に関する拙論を発表する機会を得、予定通り出版された。

本年度は「旅費」がほとんど生じなかったため、予算の消化が大幅に遅れることとなり、補助事業期間延長を申請せざるを得ない状況となった。本年度以後、オンラインで行われた学会、研究会、シンポジウム等を積極的に聴講し、数々の恩恵を受けた。

(4) 2021年度の研究成果

前年度に引き続き、海外渡航調査は行わず、文献資料の収集や整理に時間を割き、本課題について総括する年となった。前年度と同様、本務校の図書館を通じて海外からの文献資料の入手を試みたが、希望するものがすべて入手できたわけではなく、難儀したと言わざるを得ない。

一方で、青山学院大学の佐藤亨教授と共に、Kavanaghが1938年に発表した小説*The Green Fool*の翻訳（日本語訳）に本格的に取り組んだ。本作には本研究課題に関連する場面も部分的に見られるため、今後も継続して作品理解を深めつつ、翻訳を仕上げていく予定である。また2022年には、2020年に逝去した詩人Eavan Bolandについて、彼女によるKavanaghの読解を中心にまとめた論考を発表した。論究の過程で狭義での本研究課題との関連性は薄くなってしまったものの、多くの後続詩人に影響を与えたKavanagh詩の特質の一端を示すことができた。

以上、本研究課題を通じてPatrick Kavanagh、Michael McLaverty、Sam Hanna Bell、Shan Bullockの作品に関連する論考を発表することができた。その他にも、John Hewitt、W. R. Rodgers、John Boyd、Robert Greacen、Barbara Hunter、Roy McFaddenをはじめ、20世紀半ばにかけてのアルスター／北アイルランドの文芸動向に関連して、今後も調査を継続したい作家は多く存在する。残された課題について、引き続き理解と発信に努めたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中村 仁美	4. 巻 29
2. 論文標題 Michael McLaverty, Call My Brother Back 論 - 「場所」のリアリズムをめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館英米文学	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hitomi Nakamura	4. 巻 23.2
2. 論文標題 “An Example of Dissidence”: A Reflection on Eavan Boland's Reading of Patrick Kavanagh	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ABEI Journal: The Brazilian Journal of Irish Studies	6. 最初と最後の頁 105-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村 仁美
2. 発表標題 パトリック・カヴァナと「伝統」
3. 学会等名 日本アイルランド協会第27回アイルランド研究年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hitomi Nakamura
2. 発表標題 "Shancoduff Revisited: Patrick Kavanagh and the Idea of Place"
3. 学会等名 Irish Literature in the British Context: Voices from Kyoto
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Hiroko Ikeda and Kazuo Yokouchi (eds) (Mari Mizuno, Miki Iwata, Kazuo Yokouchi, Naoyuki Mizuno, Taeko Kakiyara, Peter Robinson, Luca Crispi, Hitomi Nakamura, Mariko Nishitani, Hiroko Ikeda, Celia de Freine)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 139-156
3. 書名 Irish Literature in the British Context and Beyond: 21st Century Perspectives from Kyoto (Reimagining Ireland Book 97)	

1. 著者名 立命館大学英米文学会（編）（中村 仁美）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 97-111
3. 書名 『英語文学の諸相 立命館大学英米文学会論集』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------